

藤原宮東面中門・東面大垣の調査（飛鳥藤原第 168-2 次調査）記者発表資料

2012 年 3 月 28 日

独立行政法人 国立文化財機構

奈良文化財研究所 都城発掘調査部

※ 今回の調査では、現地説明会および現地見学会はおこないません。

発掘調査地： 奈良県橿原市高殿町

発掘調査期間： 2011 年 7 月 21 日～8 月 30 日

発掘調査面積： 199.5 ㎡

1. 調査地の概要

本調査地は、藤原宮東面の中央付近に位置する。周辺の調査例としては、今回調査区の北方に位置する第 24・27・29 次調査で東面北門・東面大垣およびこれに伴う内濠・外濠が検出されているほか、本調査区から約 40m 西側でおこなわれた第 33-4 次調査やその南側の第 162-1 次調査では、藤原宮東方官衙地区の建物や先行条坊（東二坊坊間路）とその両側溝が検出されている。第 33-4 次調査で出土した瓦類は、東面北門・東面大垣出土のものと同通することも指摘されている。本調査区は、周辺の調査成果からみて東面大垣推定位置に当たり、付近には東面中門の存在も想定されていたが、正確な位置は未確定であった。

当初、調査区は南北 9m×東西 14m で設定したが、調査の途中段階で北側への遺構の広がりが予想されたことから拡張した。拡張後の調査区は南北 14m（東辺は 14.5m）、東西 14m で、調査面積は 199.5 ㎡である。発掘調査に要した期間は 2011 年 7 月 21 日から 8 月 30 日までである。

2. 調査の成果

本調査区では、地山の上に古墳時代以前の堆積土（黒褐色砂質土）があり、その上を藤原宮期の整地土（暗褐色砂質土）が覆っていた。また、調査区の北西部には地山が急激に落ち込む谷状旧地形があるが、藤原宮期に整地土で埋め立てられている状況を確認した。遺構の多くは藤原宮期の整地土上面で検出したが、調査区東南部では削平のたれ地山上面で検出した遺構もある。

検出した主な遺構は、藤原宮東面中門、藤原宮東面大垣、先行四条大路南側溝、大土坑 2 基、斜行溝 3 条、土坑・小穴群である。以下、主な遺構について述べる。

① 藤原宮期の遺構

藤原宮東面中門 調査区北半で検出した礎石建物。礎石据付穴 6 基を確認した。その位置からみて東面中門（建部門）と考えられる。検出したのは桁行 1 間分、梁行 2 間分である。柱間は 17 尺（5.04m）等間であり、南面中門（朱雀門）や北面中門（猪使門）をはじめとする既知の宮城門（桁行 5 間：25.2m・梁行 2 間：10.1m、柱間 17 尺等間）と同規模と考えられる。後世の削平のため、基壇・基壇外装等に関する痕跡は残されていなかったが、東側柱列および中央柱列南側の柱位置には礎石据付穴と抜取穴が確認でき、根石もよく残っていた。その他の柱位置では礎石据付穴は検出できなかったものの、抜取穴は不明瞭で根石もほとんどみられなかった。このうち西側柱列の 2 基については、断割り調査の結果、藤原宮廃絶以後に礎石を落し込むために掘られた穴により破壊されたためであることが判明した。なお、建物全体におよぶ掘込地業は認められなかった。

礎石据付穴は不整形ないし隅丸長方形で、南北2.6m～3.7m、東西1.9m～3.9mをはかる。西側柱列の2基の礎石据付穴は、検出面からの深さが0.6～0.7mである。その内部では、礎石位置を中心に大型の円礫～垂角礫（長径10～20cmを主とするが、大きいものでは40cmを超える）を多量に入れながら、灰褐色粘質土と暗褐色砂質土を交互につき固めて基礎地業をおこなっている状況が確認できた。これら2基の礎石据付穴は、谷状の旧地形を埋め立てた場所に位置する。一方、妻側中央の礎石据付穴は検出面からの深さが0.2mと浅く、また妻側東隅の礎石据付穴も、底部まで掘り下げてはいないものの、断面形状からみて掘込みは比較的に浅いと推測され、いずれも上記のような地業をおこなった痕跡はなかった。

これまでの調査では、第1次調査の南面中門で根固めの礫が詰められた礎石据付穴下底部が、第18次調査の北面中門でも、今回の東面中門と同様に、礎石位置に礫を詰めた穴の下底部が検出されている。これらのなかでも、今回調査した東面中門の礎石据付穴は、最も良好な遺存状態にあった。

なお、礎石据付穴周辺において、それより新しい直径0.4～0.6mの小穴群を検出している。建物の建設が解体に伴う足場穴の可能性が考えられる。

藤原宮東面大垣 宮の東面を画する掘立柱南北側で、東面中門の棟通りに取り付く。3基の大型柱穴を検出した。

柱間は門への取り付け部も含め9尺（約2.7m）等間であり、従来の調査知見と一致する。柱掘方は長辺2m×短辺1.5m

の隅丸長方形で、断削り調査をおこなった2基の検出面からの深さは、0.95mと1.4mであった。門に最も近い1基の方が深い。柱抜取穴は長さ3.8m～4.1mにおよぶ。これまで検出されている大垣柱穴（右表）のなかでも、今回調査で検出した大垣柱穴は遺存状態が良好な例といえる。

表 既発見の大垣柱穴の深さおよび掘取穴の長さ

名称(括弧内は調査次数)	柱穴の深さ	柱穴取穴の長さ
東面大垣(24-27-29)	0.7～1.3m	2～3.5m
西面大垣(34-37-96)	0.7～1.3m	0.8～1.9m
南面大垣(29-6-34+118-124)	0.7～1.4m	1.5～2.6m
北面大垣(18-104+42年)	0.6～1.1m	1.6～2.5m

② 藤原宮廃絶後の遺構

大土坑1 東面中門西側柱筋の礎石据付穴2基のあいだに掘り込まれた、長さ6.1m、幅2.4m、深さ1.2m以上の不整形楕円形土坑。内部から礎石を2個検出した。西側柱筋の礎石2個をまとめて撤去するために掘られた、落とし込み穴と考えられる。宮城門における礎石の発見は、第37次調査の西面中門（佐伯門）につき、今回が二例目である。北側の礎石が南側の礎石の上に重なっているため、南→北の順で落とし込まれたと分かる。

礎石は2個とも石英閃緑岩（飛鳥石）で、造り出しなどは確認できないが、北側のものは1面が極めて平滑で、加工を施しているとみられる。最も平滑な面を上面とみると、北側のものが長さ90cm×幅85cm×厚さ95cm、南側のものが長さ100cm×幅70cm以上×厚さ150cmをはかる。第37次調査の西面中門で土坑から検出された礎石（長さ133cm×幅138cm×厚さ87cm）と、ほぼ同規模かやや小さい。

大土坑2 調査区の南東隅で検出した、長さ4.3m以上、幅1.7m以上、深さ0.2m以上の皿状の大型土坑。藤原宮式の軒瓦片（6278G）を含む。宮廃絶後の廃棄土坑の可能性がある。

③ 藤原宮造営期の遺構

東西溝（先行四条大路南側溝） 調査区北側に検出した、幅1.3～2.0m、深さ0.3～0.4mの東西溝。藤原宮期の整地土と考えられる暗褐色砂質土直下から掘り込まれており、東面中門の造営以前に設けられたものと考えられる。溝埋土から7世紀後半の平瓶が出土した。溝の位置から、先行四条大路南側溝の可能性が高い。既発見の先行四条大路の道路側溝の位置にもとづいて推定された道路心から、心々距離で南へ約7.4m（21大尺）をはかる。藤原京内の四条大路の側溝幅にはある程度のばらつきがあるものの、計画上は5大尺（約1.8m）で、側溝心々距離が45大尺（約16m、したがって道路心から南側溝心までの距離は約8m）とされている。本例はこれらの数値とほとんど矛盾しない。

④ 藤原宮以前の遺構

斜行溝 1 調査区南西において排水溝断面で検出した、幅 2.8～3.2m、深さ 0.45m 以上の斜行溝。南東から北西へ延びる。地山上面から掘り込まれている。溝の埋土は黒褐色砂質土で、部分的にレンズ状に堆積する黒褐色粘質土が確認できる。藤原宮期より古く、弥生～古墳時代に属するものと推測される。

斜行溝 2 調査区南西において排水溝断面で検出した、幅 50～60cm、深さ 0.25m の斜行溝。南東から北西へ延びる。地山直上に堆積する、古墳時代以前の堆積土と考えられる黒褐色砂質土上面から掘り込まれている。藤原宮期より古く、弥生～古墳時代に属するものと推測される。

斜行溝 3 調査区南側中央部で平面検出した、幅 40～70cm、深さ 0.2m のコの字状を呈する斜行溝。重複関係からみて斜行溝 2 より新しいが、藤原宮東面大垣の柱穴より古い。藤原宮期の整地土と考えられる暗褐色砂質土が削平された箇所や、地山上面での検出であり、本来は斜行溝 2 と同じく黒褐色砂質土上面から掘り込まれたものと推定される。

3. 出土遺物

出土した遺物は大半が土器類（整理箱 7 箱）である。藤原宮期や 7 世紀後半の土器も出土しているが、その他の多くは弥生～古墳時代の土器である。瓦類（整理箱 2 箱）は少ないものの、調査区北側の東面中門付近では出土量がやや増える。軒瓦は土大土 2 より出土した軒瓦瓦 1 点（6278G）を含む、小破片 2 点のみである。

4. まとめ

①藤原宮東面中門を検出

東面中門（建部門）の南端 1 間分を検出し、その正確な位置が確定した。その結果、藤原宮の構造を解明するための具体的な情報が追加された。これまで、藤原宮の宮城門は 6 ヵ所が調査（門の位置が確定しなかった調査を除くと 5 ヵ所）されており、このうち南面中門（朱雀門）・北面中門（猪使門）・東面北門（山部門）において、礎石据付穴や残存する根石の位置から門の規模・構造が明らかになっている。今回発見した東面中門は、既発見の宮城門遺構と同規模（桁行 5 間・梁行 2 間、柱間 17 尺等間）と考えられるが、遺構の遺存状態がそれよりはるかに良好であった。このため、いくつかの新知見を得ることができた。まず、門に伴う掘込地盤はおこなわれていないが、一部の礎石据付穴については、内部に大型の礫を多量に入れつつ種類の異なる土を交互につき固める、という基礎地盤が施されていた。こうした礎石据付穴は、谷状の地形を埋め立てた場所りに位置している。北面中門でも、礫の詰められた穴は軟弱地盤上に位置している。これらのことから、建物範囲全体におよぶような掘込地盤はおこなわれていないものの、地盤の状況に応じた基礎を設けていたと考えられる。また、礎石の実物を発見したことにより、礎石の高さと礎石据付穴の状況からみて、礎石の上面は検出面より 90cm 以上高い位置にあったと推定することができる。

②東面中門に取り付く東面大垣を検出

東面大垣の掘立柱柱穴を 3 基検出し、この地区における藤原宮東限の位置が確定した。これまで知られているとおり、大垣は 9 尺等間の柱間で、門の棟通りに取り付いていることが確認できた。柱掘方は既発見例と同規模だが、柱抜取穴は既発見例よりも長大であった。掘方は深さ 1.4m 残存しているものがあるため、ある程度の削平を受けているものの、大垣と東面中門の遺構の残存状況は非常に良好であることが判明した。

③先行四条大路南側溝を検出

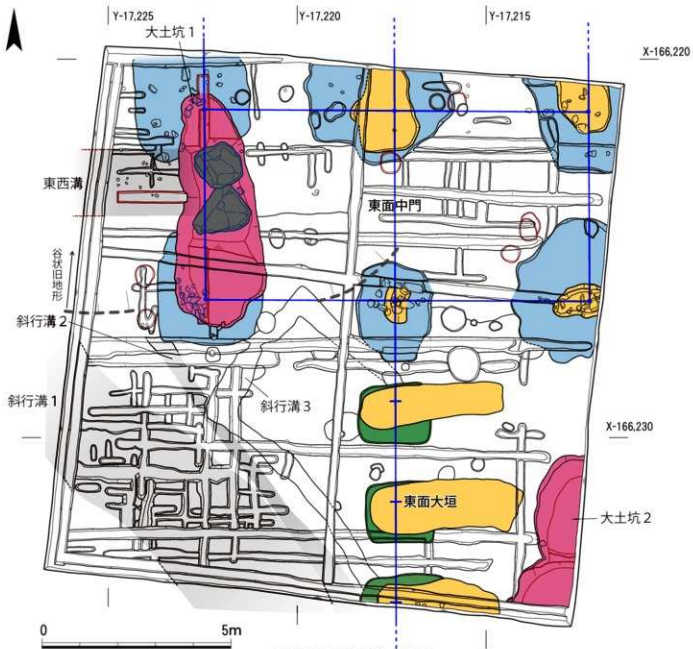
東面中門の下層において、先行四条大路南側溝と考えられる東西溝を検出した。藤原宮東限における先行四条大路南側溝の検出は、今回が初めてである。



藤原宮発掘調査位置図(1:10000)



第168-2次調査区位置図(1:5000)



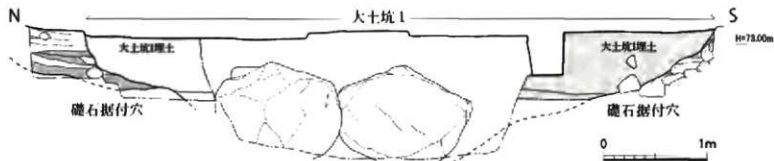
遺構平面図(1:100)



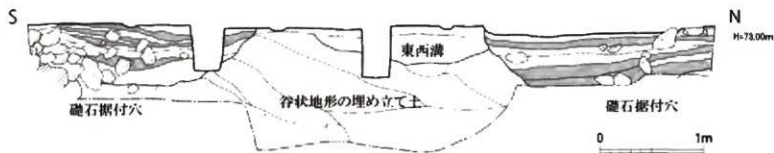
大土坑1 出土礎石(南から)



西側柱列南端の礎石据付穴に詰められた礎石(北から)



大土坑1東壁断面図および礎石立面図



大土坑1西壁断面図(礎石据付穴・谷状旧地形)